

ロシアに育つ日本のアイリス

マリヤ・ユラーソヴァ

訳：関根 秀人

ロシア在住の関根氏がマリヤ・ユラーソヴァ氏の VESTNIK TSVETOVODA 誌 (No04/144 2010/2) の記事を翻訳し投稿していただきました。

杜若 にたりやにたり 水の影

松尾芭蕉

毎年6月末になると胸がドキドキしはじめる。庭に出ると、蝶々が池の上でひらひら舞い、日本のアイリスの花びらが水面に映るのを観るために、そそくさと池のほうに向かうのである。アイリスはのどかさをもって美しく、粋な繊細さにあふれており、それを観ていると、なぜ日本人たちが毎年花見にでかけ、春に桜を楽しむように、アイリスを愛でるのがわかるだろう。

この驚くべき植物は *Iris ensata*、別称 *Iris kaempferi* というノハナショウブがその元になっている。ロシアでは沿海地方の南部、クリル諸島で、ロシア以外では日本、朝鮮、中国北東部に見られる。ノハナショウブは湿度の高い野原に植生している。この植物の野生種でさえ極めて鑑賞に堪えうるもので、高さ 80 センチほどの花茎は、外花被の中央に黄色い目（シグナル）をもつ濃紫色の大きな花をつける。野生種の中にはごく稀に白色や被色の花を咲かせるものが見つかるが、そのような色の変異は安定しており、アイリスの育つ環境が変わっても保持される。野生種の場合、一様に3つの花びら（外花被）が下に垂れ下がっている。このような花の形態を「垂れ咲き」ということがある。

数多くの種類が「花菖蒲」と呼ばれる日本では、この植物は数百年にわたって品種改良が行われてきている。それが文献に登場するのは 15 世紀にさかのぼり、1755 年にはすでに数百種類の品種があった。日本の文化的伝統の中でこのアイリスは、その剣のようなすらっとした葉の形から、成人男性の権化であったり、男児のシンボルであったりする。ヨーロッパではどうかといえば、はじめて花菖蒲が紹介されたのは、1857 年のベルギーでの花卉展であった。しかし花菖蒲が人気を博

したのはヨーロッパ大陸ではなく、アメリカであった。日本以外ではまさにアメリカが花菖蒲の新たな品種づくりで先んじている。

花菖蒲の品種ははなはだ数多い。品種の多さに迷わないよう、花菖蒲独特の分類がなされている。高さ、花の大きさ、そして最も重要なのは、花の形によって分類がなされている。花菖蒲には3つの基本的なタイプがある。それは日本で生まれたもので、19 世紀に品種改良がすすめられた産地の地名をあてている。

アイゼ（伊勢）系〔訳者注：ISE の誤読と思われる〕は野生種にとっても似ている。このグループの花菖蒲は、3つの外花被が垂れ下がった三英花（single）が特徴で、花茎は葉より高くない。まさにこのタイプの花菖蒲が日本では規範的とされている。有名な品種改良家である平尾先生（Shuichi Hirao）は花菖蒲に関する自著の中で、「このグループは高貴な若い女性の優美さを持ち合わせている」と書いている。

江戸系には三英花と6つの花びらをもつ六英花（double）がある。江戸系の外花被は波を打っていることがまれではない。それはほとんど平らか、少しだけ垂れ下がっている。江戸系の花茎は葉よりも高くなる。江戸系の端正な姿は、平尾先生の意見では、当時の東京に長い間いきつづけた商人文化を彷彿させるという。

そして最後に肥後系、花茎が高く、9から12枚の外花被をもつ大きな花の咲くタイプである。このような花を多弁花（multi petal）と呼んでいる。外花被（ф о л ы）はお互いに軽く押し合い、中央には花柱支のほか、短く、しばしば変わった形の内花被（petaloid）がある。平尾先生によれば、肥後系は、「かつての日本の封建制独特の荘厳な品格」に満ちているという。江戸系と肥後系の花菖蒲はその豪華さゆえにアメリカおよびヨーロッパで人気だが、日本では伝統的にアイゼ〔伊勢〕系が好まれている。

日本のアイリスは開花時期によっても区別がある。簡略化された分類では、早生（E）、中生（M）、晩生（L）となる。しかしそれぞれの品種の具体的な開花時期は当該植物が栽培されている地域の気候条件を考慮して示されることを記

憶しておかねばならない。たとえば、東京で5月末に咲き始める品種は、モスクワ郊外では当然のことながら、ずっと遅くに咲く。とはいえ、この分類そのものは極めて重要である。なぜならば、晩生品種はロシアの気候にとっては必ずしも適したものとはいえないからである。

花菖蒲の色の幅は実にひろい。さまざまなニュアンスの藤色、清楚な白、華やかな深紅色、つやのある空色に鮮やかなピンクなどが並んでいる。これらの色が絶妙な組み合わせとなって絡み合い、「花びら」を描いたものは日本の書道の傑作のようにさえ見える。

いくつかの花菖蒲の花はジャーマン・アイリスと異なり、5日までしか咲くことができない。花菖蒲の唯一の欠点は芳香がない点ということができよう。

花菖蒲を、流行りの外来珍種などとみなすべきではない。第一に、この魅惑的なアイリスの先祖は、ロシア起源の植物だということ。第二に、花菖蒲のロシアにおける品種改良はすでに19世紀に始まっていた。帝国植物園の園長で、ロシア園芸協会の創始者であるエドゥアルド・アヴグスト・レゲルは、野生種から採集した種を使ってサンクト・ペテルブルグでの栽培にかなり成功していた。ソ連時代になっても花菖蒲への関心は消えなかった。アカデミー会員のヴァヴィーロフ N. I. のおかげで日本から数多くの花菖蒲のコレクションがもたらされ、それはコーカサス地方の黒海沿岸でヴァシーリィ・アルフォーロフが栽培にあたり、ロシア最初の花菖蒲のひとつが彼にちなんで命名された。ほぼ同じ頃、モスクワ大学のノシロフ V. M. 教授は自らの責任でモスクワ郊外で花菖蒲の品種改良を始めた。この素晴らしい学者は自己資金で植物を手に入れ、その栽培で輝かしい成功をおさめ、たわわに花を咲かせることのできる農業技術を開発した。その後、彼の業績を引き継いだのはパヴェリエフ V. T. で、花菖蒲を新たな農業技術で栽培する実績を積み重ねた。サンクト・ペテルブルグで花菖蒲に取り組んでいるのはロジオネンコ G. I.、マカロヴァ I. A.、極東ではミローノヴァ L. N.、アルタイ地方ではドルガノヴァ Z. V. がいる。これらの優れた専門家たちは数多くの美しく、かつ、ロシアの気候のなかで特に安定した品種を生み出した。花菖蒲の品種改良の作業はモスクワ郊外でも続けられている。モスクワ郊外で抜きん出た活動をしているのは花菖蒲の

愛好家たちである。新たな品種がロシア・アイリス協会の会員であるカウレン M. E.、ヒミナ N. I. らによって登録されている。

過酷な気候条件に負けないロシアの品種を生み出すことは、明るい展望を開き、わが国の庭に花菖蒲を普及させることに希望をもたらすことは間違いない。しかし、残念なことに、これらの品種は大方、コレクターにしか手の届かない代物となっている。一般の園芸愛好家は、ロシアの店に並ぶもので満足することを余儀なくされている。それは外国で品種改良された花菖蒲であるが、うまく育てるにはしかるべき農業技術の要件を満たさねばならない。

花菖蒲の生育に最も影響する三要素は、酸性の土壌、温かい温度、高い湿度である。何よりもまず順に入れねばならないのは、花菖蒲は嫌石灰植物であること、すなわち全く石灰分に耐えられな



いのである。花菖蒲は酸性、さらには弱酸性の土壌が好ましいが、土壌に過剰なピートがあるのはきわめて良くない。もっとも良いのは、砂分の多い砂質粘土である。

花菖蒲は日当たりの良い暖かい場所を好む植物である。半日陰に植えると、開花期がかなり遅れ、開花を見ない危険性を伴う。北の地方では、年間のプラスの温度のトータルが必ずしも十分ではなく、ゆえに、シーズン中により多くの温度があれば、開花する可能性も高くなる。

花菖蒲は非常に多くの水分を必要とするが、シオウブのように恒常的に水のある場所に植えてはならない。植え付けは、とくに開花時期に湿度が高くなるような場所に行く必要がある。花菖蒲の祖国では開花時期にはあえて水を放水するほどである。

リトアニアの有名なアイリス研究家であるコンドラタス E. は植物に湿度を保つための徹底した給水システムを提案している。しかし、別のア

アイデアを活用したほうがはるかに簡単である。たとえば、花菖蒲をくぼ地に植えつけたり、あるいは、植えた場所の縁を高く盛り上げ、水を維持できるようにするなど。もちろん、頻繁に、たっぷり散水することである。

花菖蒲の植え付けは春でも晩秋でも可能だが、植え替えと株分けは夏の終わりか9月前半の開花が済んだ時期だけである。そうでないと、寒くなるまでに新しい場所で根付くことができない。植え付けの前には葉と根を必ず刈り込む。茎根は地下5～7センチに植え付け、温度と湿度を保つためにマルチングを施す。ほとんどの品種で冬は枯れた葉、針葉樹の枝、あるいは不織布で覆う必要がある。

正直言えば、私は運が良かった。私の庭はほとんどリャザン州[訳者注：モスクワより南東、緯度で2°南]にあり、当然のことながらモスクワ郊外の北部やサンクト・ペテルブルグ郊外より暖かいからである。花菖蒲は、土壌が常に湿った自然の池の岸の日当たりに植えてある。春の増水時には植物の一部が水の下に位置する。植え付け場所の土壌ははじめから酸性を示し、植物次第で土壌の組成を若干調整すればよいだけだった。植え付けにあたってはそれぞれの穴に完熟した堆肥を混ぜた。私の花菖蒲は花壇の一部となっているため、空洞の覆いは作らない。秋に葉を切り落とした後、雪を除けるために針葉樹の枝をかぶせるだけである。過去6年、冬の間、ひとつの花菖蒲もダメにしなかった。肥料はKEMIRA [訳者注：NPK複合肥料]を施し、シーズン中には2度以上、各種微量元素を含有する「GUMAT7+」溶液を与え、夏には必ず刈り草でマルチングを施す。結果は良好である。

私のコレクションは多くないが、毎年増えている。品種によっては思いがけない喜びをもたらしてくれるが、ときにはガッカリさせられることもある。たとえば、「Light at Dawn」はある海外の情報源ではとりわけ晩生とされているが、私の庭では決まって一番最初に咲き始める。「Fortune」の花の大きさは14センチを上回らないはずだが、私のは16センチにもなる。華やかで柔らかな「Darling」(伊勢系)は植え付けた年にさっそく咲きはじめ、株も見事に育ち、シーズンごとに花つきの数も増えている。しかし同類の「Royal Banner」は、その濃厚な深紅色に感動させられるが、来る年も来る年もひとつの花しか咲かせない。「Pin Stripe」は安定してたくさんの花が咲くが、「Sylvia's Masquerade」はまだ一度も花を咲かせていない。

もちろん私のわずかな経験をもって確固たる結論を出すことはできないが、花菖蒲が決して難しく、ロシアの庭で厄介なものではないことは言えよう。

驚くことなかれ、ある国では花菖蒲を「ロシア生まれのアイリス」と呼ばれていることをご存知だろうか？思うに、意味深な言い方である。古い東洋の書物に「千里の道も一歩から」とあるが、細かなわずらわしさを恐れるべきではないのではないか！夜の短い、魅惑あふれる6月の下旬、白夜を迎えると、あなたの庭にも花菖蒲が咲き始めるだろう。

編集部より：掲載写真は、翻訳者関根秀人氏がモスクワ郊外に所有するダーチャで撮影したものです。

